

# Studien zum Wandel des Gotthelf-Bildes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shimura, Megumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00001059">https://doi.org/10.24517/00001059</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ゴットヘルフ像の変遷

——ゴットヘルフ研究史序説——

志 村 恵

ゴットヘルフ研究は始まったばかりで……まだほんの少し固い土台に立っているだけである。<sup>1)</sup>

## はじめに

スイス・エメンタールの牧師作家イエレミーアス・ゴットヘルフ (1797—1854) は、「この偉大でがんこな叙事詩人ほど文学史の概念の網に逆う人物はいない<sup>2)</sup>」という W. コールシュミットの言葉にもかかわらず、文学史のどの範疇にも属さない孤立した存在という理解から、次第にその文学史上の立場を限定されつつある。従って、こうした状況の中でゴットヘルフ研究の迎って来た道のりを概観しておくことは、特殊な型での受容史という意味においても、また、現在ゴットヘルフ研究が有している問題や今後進むべき方向を知る上でも意義あることと言えよう。

### 1. 同時代におけるゴットヘルフ像

ゴットヘルフはその生前、実に多様なレッテルを貼られた。彼の政治、神学思想は“Der christliche Volksbote aus der Schweiz”<sup>3)</sup>紙などの敬虔派からは「真のキリスト教ではない<sup>4)</sup>」と非難され、リベラル派の悪党とののしられたし、“Der deutsche Bote aus der Schweiz”<sup>5)</sup>紙に代表される急進派からは、保守反動の中心人物とみなされていた。また、作家活動についても、W. メンツェルや I. ゲルスドルフは彼を青年ドイツ派や急進派に対抗する「理想的で純粋なキリスト教民衆作家<sup>6)</sup>」と称賛しているが、その牧師らしくない粗野な表現、文体と余りに過度な省察、論争的脱線に関しては、思想の左右の区別なしに厳しい批判が下された。たとえば、最初彼のユーモアと民衆性を誉め称えた“Grenzboten”<sup>7)</sup>も、1840年代の後半から、そして特に“Zeitgeist und Bernergeist” (1852年)以降、作品における政敵への個人攻撃や政治的議論が激しくなると、ゴットヘルフの創作姿勢に批判的になった<sup>8)</sup>。

こうした当時のゴットヘルフ批判を、特に写実主義とリベラリズムの立場から総括したのが同国人でもあるゴットフリート・ケラー (1819—1890) である。ケラーはゴットヘルフについて全部で四つの評論を書いているが、その批判は主に次の二つに要約できる。第一に、ケラーはゴットヘルフの作品の有り方、特に文体を攻撃する。彼はこの牧師作家が宗教性を追求するのはまだ許せるが、その方法が問題だと言う。すなわち、非難されるべきはゴットヘルフの宗教的部分が

「坊主臭くて悪意があるだけではなく、それが作品をだめ<sup>10)</sup>にしている」点なのだ。要するに、宗教、教化的部分のために文体が不統一<sup>11)</sup>で投げやりになり、まるで文学の才能を自ら隠すように見えるほどだ<sup>12)</sup>というのである。ゴットヘルフは繰り返す、文学は詩的、美学的であってはならないと言っているが、ケラーにしてみれば、美学的統一性の欠如や芸術的努力の不在のこうした弁解は、芸術作品ができないからそう言っただけのことで、欠陥に対しては何らの釈明になっていない<sup>13)</sup>のである。

第二に、ケラーは「ゴットヘルフの見当はずれの禁欲主義が彼の作品の型態的欠陥の原因の全てではない。……今日我々の行動に重大な関わりをもつ世界観が彼においては未熟で近視眼的な性質のものであったがゆえに作品の欠陥が決定的なものとなったのである<sup>14)</sup>」とゴットヘルフの世界観を批判する。ケラーによれば、この牧師は古い体制と急速に意味を失いつつある「キリスト教世界」にあくまでも固執する保守主義者であり、従って、善良で道徳的人物はこの世でも神からの祝福を受け、人々を欺く不道徳な悪人の類はみな急進派や自由主義者だとの白黒はっきりしたシェーマは、まさに彼の無知蒙昧で誤った世界観によるものだ<sup>15)</sup>というのである。

しかし、こうした批判にもかかわらずケラーはゴットヘルフの作家としての才能は認めていた。「ある人は彼をオランダ風の粗野な画家と呼び、ある人は田舎文士と、またある人は自然の描写にたけた作家と呼ぶが、つねに彼の一面しか捉えられていない。事実は彼が叙事文学の大天才<sup>16)</sup>ということにつきる」と。つまり、神学、哲学的誤謬と文体および文学的構造の欠陥にもかかわらず、ケラーは彼の写実的な自然・人間描写と、農民を上から見下して教化を与える啓蒙主義とは異った、農民の只中に入ってその生活を描く民衆的姿勢を高く評価するのである。だが、この結論はリベラルな写実主義作家の立場からは必然的に導き出されるものであって、もしゴットヘルフがケラーとは違った地平に立つとするならば、我々はゴットヘルフの歴史的立場を相対化するためにも、このケラーの批判の射程から一旦外へ出て、別の基準で評価しなおす必要がある。そうした意味で、ケラーの批評が完全なもの<sup>17)</sup>とされ、批判的堀り下げが阻害されてしまったという W. ギュンターや W. バウアーの指摘は的を得たもの<sup>17)</sup>と言えよう。

## 2. 写実主義、自然主義のゴットヘルフ像

1848年以降文学の一般的傾向は大きく変わり、それ以前のパラダイムとは異ったものとなった。この新しい文学思潮の特徴として我々は、創作の厳しい統一、美学的に整合した体系、非イデオロギー的客観描写、中間トーン(mitlerer Ton)への傾斜などを挙げるができる。また、それと同時に読者の側の期待も必然的に変化した。従って、晩年のゴットヘルフは、作品における政治的議論が過激になったこともあり、急速に読者を失った。そして1854年の彼の死後、つまり写実主義のさらに徹底した時代においては、ゴットヘルフはスイスの愛国的読者を除いて、せいぜい K. L. イママン(1796—1840)から B. アウアーバッハ(1812—1882)をへて L.

アンツェングルーバー(1839—1889)に至る農村小説(Dorfgeschichte)の系譜において、イママンやアウアーバッハの背後にときおり顔を出したり、あるいは民衆教化を目指す内的宣教(Innere Mission)などのキリスト教界、とりわけ彼らが教化の目的で設立した図書館等に知られる程度<sup>18)</sup>の存在になった。ゴットヘルフはベルリンのシュプリンガー社が出した選集にもかかわらず、<sup>19)</sup> 辺境スイスの忘れられた農民作家となったのである。従って、文学史の表舞台に再び登場するためには、彼は言わば再発見されねばならなかったのであるが、その再発見がなされたのはその後文学界において支配的になっていた自然主義のもとであった。

ゴットヘルフは“Bauernspiegel”(1837年)や“Die Wassernot im Emmental”(1838年)など社会批判の色彩が濃い作品で出発した作家であり、精密な描写によって社会のもつ問題や汚物のようなその裏側まで暴こうとする自然主義文学とは言わば親しい存在であるし、またコールシュミットが「入念な心理学的実験<sup>20)</sup>」と呼ぶほど、ゴットヘルフの性格および内面描写は心理学的であって、たとえば“Bauernspiegel”の主人公 Mias が人々に冷たい仕打ちを受け、心の中の愛の芽が次第に枯れてゆく様子や、“Anne Bäbi Jowäger”(1843/44年)において、Anne Bäbi が精神的に追いつめられて狂気に至り、自殺を企てるまでの心理描写を読めば、人間の心理を重視する自然主義者たちが彼に目をつけ、彼の中に自然主義の先駆者を見たとしても不思議ではない。

ゴットヘルフを自然主義の視点で理解する代表は A. バルテルスである。彼はゴットヘルフを「自然主義の父<sup>21)</sup>」と呼んでいるが、その彼によればゴットヘルフの自然主義は、ゾラ流の芸術ドグマ的自然主義とは趣を異とする自然で無意識な自然主義<sup>22)</sup>である。しかし、この「自然で無意識」という考え方にはこの時代、すなわち1880年頃から今世紀初頭にかけてのゴットヘルフ理解の問題点がある。なぜなら、この解釈には農村小説から故郷文学をへて、さらに民族主義的傾向の強い「血と土の文学」(Blut-und Bodenliteratur)に結びつく危険があり、同時に、ゴットヘルフにスイスの大地と自然が生み出した自然発生文学という神話のヴェールを被せることになるからである。たとえば、J. ナードラーはこうした考えに立って、スイス人には不評であったその著書『スイス文学史』において、「ゴットヘルフの本は美しくあろうとはしなかったし、美しく作られてもいないがゆえに、自然が美しいように純粹で正真<sup>25)</sup>なのだ」としている。

これに対し、折しも世紀転換期からナチス終焉に至る独立存亡の危機の時代にあったスイスにおいても、当然のことながら、ゴットヘルフの中にエメンタールの自然が生じた故郷文学を見る愛国的な牧歌的理解が支配的となった。しかしその一方、R. フンチカーや H. ブレッシュ<sup>26)</sup>等の手で批判的全集の編纂が進められ、やがてこの全集に揃えられた資料が、これらの研究以降「安易な農民・故郷作家像が科学的文献から姿を消すほど<sup>27)</sup>」の衝撃で登場した W. ムシュクと W. ギュンターの研究の前提となったのである。

## 3. ムシュクによるゴットヘルフ理解

フロイトとユンクから影響を受け、精神分析と深層心理の視座から文学研究を試みるムシュクは、まず従来の牧歌的農民・故郷文学という理解から離れ、ゴットヘルフの中に秘密にみちた「祭司」を見る。ムシュクによれば、農民世界はキリスト教文化圏においても異教・呪術的なものと親密な関係にとどま<sup>88)</sup>っていて、ゴットヘルフはその様な農民世界の中で「祭司」としての自らの職務を意識しつつ、過去を知り尽し、また未来のために働く「預言者」<sup>80)</sup>の役割をその身に引き受けたのである。これによってムシュクは、ゴットヘルフの中にゲルマンの太古の姿、神話的あるいはデーモン的世界を取り入れようとする。次に、彼はゴットヘルフが常に母、姉、妻、娘からなる女性中心の環境に暮していたこと、そして特に少年時代からの母親の強い影響を根拠として、彼の文学の中に神秘的な「母なるものの神話的表象」<sup>80)</sup>を見る。前述のように、農民はキリスト教世界という文脈においても大地と不可避的に結びついており、母なる大地の呪術的力に捕えられているのであり、従ってゴットヘルフの作品には多産への崇拜<sup>81)</sup>、女の持つ予感と聖化の能力への尊敬<sup>82)</sup>、母なるものや Allmutter<sup>84)</sup>への畏敬とさらにはエロス、呪術的なもの<sup>85)</sup>が満ち溢れているというのである。こうしてムシュクは実直な村の牧師から、神秘に包まれた「太古の秘密の守り主」<sup>86)</sup>、「神話を作り出す力を持つ詩人」を創出した。しかし、これは少し行き過ぎた解釈ではないだろうか。たとえば、エロスのものについてはヘアツォーゲンブーフゼーにおけるゾフィー・ヘマン(1803—1832)との醜聞、神学校時代の習作、手紙<sup>87)</sup>、あるいは“Fünf Mädchen”<sup>88)</sup>(1838年)などの作品に確かに読み取ることができるが、ムシュクはこれを余りに直接かつ誇張して神話やデーモンと結びつけている。

ムシュクは第二次世界大戦後、「より重要なのは作品を貫くキリスト教思想の一般的底流である」<sup>89)</sup>とその神話的ゴットヘルフ像を修正し、キリスト教的解釈への回帰を示した。しかし、彼はここで神話的なゴットヘルフ像を完全に放棄したわけではない。現に彼はこの同国人作家を単なるスイスの国民的良心以上の存在、混乱したヨーロッパと誤った近代に対抗する声だと称え<sup>40)</sup>、ゴットヘルフの祭司、預言者としての理解を保持しようとしている。またさらには、「ゴットヘルフを考える新しい視点において重要なことは、一個の偉大な名前を文学史の中へ入れることではなく、純粋な生の尽きることのない豊かさを明らかにすることである」<sup>41)</sup>と、この時代すでに F. マルティーニや F. ゼングレ等の手で進められていた文学史編入への様々な試みに理解を示さないのである。確かにゴットヘルフは時代の危機に際し、預言者として警鐘を鳴り響かせた。しかし、これはあくまで歴史的に規定された三月革命前の時代状況に対する牧師としての危機意識から出たものであって、決して永遠なる神秘的存在としてのものではない。ムシュクがどれだけ「千年」を具現したゴットヘルフを強調したとしても、彼が「百年」を代表する時代的存在であることは動かし難いことなのである。<sup>42)</sup>

## 4. ギュンターのゴットヘルフ理解

W. ギュンターは、批判的意味におけるゴットヘルフ研究の復興に貢献し、そしてそれだけに否定的意味でも影響の大きかった研究者の一人である。彼の研究の出発点は、K. グギスベルク<sup>43)</sup>等による神学的研究の持つ一面的な宗教性の強調に対する危機感であった。ギュンターは詩的なものが宗教的なものから生み出されるという考えが、宗教および道徳的要素と詩的および芸術的要素の間の緊張関係の見せかけの解決に過ぎず<sup>44)</sup>、詩的なものを宗教的なものの副産物とするのは重大な誤りであると批判し、詩的なものは常に人間存在の全体から出るものだと、ゴットヘルフにおける美学・詩的要素の重要性を強調する。そして、その際彼が採用した美学モデルは古典主義美学のそれであった。すなわち、「ゴットヘルフの作品の持つ統一性、創造的で奥の深い一致に<sup>46)</sup>圧倒」されたギュンターは、ゴットヘルフの中に、「破壊されることのない統一と調和に基いた<sup>47)</sup>芸術」、あるいは「divene proporzione、つまり古典的芸術の持つ詩的な<sup>48)</sup>均整」を見たのである。こうして彼はこの古典主義の美学基準を手<sup>49)</sup>にゴットヘルフをホメロス、ダンテ、アリオスト、シェイクスピア、ラシーヌ、ゲーテといった古今の古典作家の列に加え、中でも特にゲーテとの類似性を示そうとした。たとえば女性像に関しては、“Geld und Geist” (1843/44年) の Änneli の自己克服を『親和力』のシャルロッテに、“Schulmeister” (1838年) の Mädeli, “Anne Babi Jowäger” の Meyeli, さらに “Elsi, die seltsame Magd” (1843年) の Elsi の優しい力強さを、グレートヒェンやオティリーエのそれと並ぶものだとする<sup>50)</sup>のである。

ところで、こうした古典主義美学観に基く「全く新しい形式と内容の調和」、あるいは叙事的統一という価値基準は、ゴットヘルフの作品に散見する彼独得の教化的省察や脱線に相容れない。しかし、ギュンターはこの矛盾を次の様に解消する。すなわち、省察は道徳的および論争的考察からだけでなく、詩的必要性から出ている<sup>52)</sup>のであり、出来事のあとに一般的省察が続くのは、彼がある種の解明の必要を感じ、省察しながら脱線して読者の関心を本来の対象から少しばかりそらせている間に、その出来事が熟するのを待つ<sup>53)</sup>ためだとするのである。つまり、省察や脱線は筋や場面の熟成のために構造的に不可欠な要素だ<sup>54)</sup>というのである。こうしてギュンターは、それまで評判の極めて悪かったゴットヘルフの冗慢な省察、脱線を古典主義美学の枠内に入れる。ところが、特に晩年の作品に見られるように、これらの部分が過剰となり、作品の整合性を著しく乱しているように思われる場合でも、彼の芸術性がそれを補って、作品の芸術的基盤は損われ<sup>54)</sup>ないと弁護するとき、我々としては苦しまぎれの弁解との印象を持たざるを得ない。

ギュンターはゴットヘルフの警告者としての自己認識やその社会批判の救済意図にいち早く気づいて<sup>55)</sup>いたし、また安易な民衆作家像を退け、同時にゴットヘルフの描く農民像の根源的美しさ<sup>56)</sup>と人間性、およびその文学史上の意義を見出し<sup>57)</sup>た。しかし、異なる時代の美学規範を尺度として評価、解釈しようとする研究態度は非歴史的であり、「人文主義的、美学的意識のない」<sup>58)</sup>ゴッ

トヘルフに古典的主義の詩的メルクマールを適用したことは少なくとも誤りである。

## 5. 歴史的ゴットヘルフ研究の胎動

ムシュクとギュンターによる新しいゴットヘルフ像の展開は多くの問題点を内包していたが、その一方で、没後百年祭（1954年<sup>59)</sup>と共に、多くの研究を触発する役割を果たしたこともまた事実である。すなわち、二人の構築したゴットヘルフ像を修正しようとする批判的研究を挑発したわけである。たとえば、イギリスの H. M. ワイドソンは有名な “Gotthelf is in and of his time”<sup>60)</sup> という言葉でゴットヘルフを同時代の網の中に引き戻し、歴史的な文脈の中で捉え直そうとする研究に先鞭をつけた。ドイツにおいても文学史的アプローチ、つまりゴットヘルフを市民的写実主義やビーダーマイアー期の視点で理解しようとする動きが出てきた。実は、ムシュクとギュンターによる研究が公けにされた同じ1930年代に、すでに P. クルックホーンによってゴットヘルフをビーダーマイアー文学に位置づける提案がなされていた。クルックホーンはスイス・エメンタールの特殊な地理的条件にもかかわらず、ゴットヘルフに道徳、民衆、故郷への執着や、フランス革命、リベラリズム、唯物主義への反感、さらには家庭を始めとするあらゆる伝統を評価する保守的態度などドイツのビーダーマイアーと共通する要素を見ていたのである<sup>61)</sup>。ただこのクルックホーンによるビーダーマイアー文学への編入の試みは、彼のビーダーマイアーの定義がまだ曖昧なものであったり、ゴットヘルフ自身がなおも素朴な写実主義の観点から論じられることが多かったことも手伝い、とりわけゴットヘルフを愛国的な郷土の英雄と考えていたスイス人から強い反発を受けざるを得なかった<sup>62)</sup>。

## 6. スイスにおける最近の研究

ゴットヘルフを王制復古期あるいはビーダーマイアー期の文学者と捉える研究について述べる前に、最近のスイスにおける研究状況をまとめておきたいと思う。

まず、Gotthelf-Kenner<sup>65)</sup> として名望高い K. フェアであるが、彼はムシュクの心理分析研究の行き過ぎやギュンターの古典主義美学に基く解釈を批判する。すなわち、彼らの影響のもとで没後百年祭と前後して起った空前のゴットヘルフ・ブームに対して、——たとえば、このときスイスでは E. バツリ脚色によるゴットヘルフのラジオ・ドラマが放送されたのであるが、街はまるでサッカーの国際試合のときのように人影がまばらになったという——フェアは、ゴットヘルフの神話化が再び起る恐れがあると冷静に警告した<sup>66)</sup>。しかし、彼はビーダーマイアー期とゴットヘルフという観点については否定的態度を取る。元来、フェアはゴットヘルフを写実主義の色彩が強い作家と捉えていることもあり、ビーダーマイアー期との関係については、この概念を「小市民的ビーダーマイアー」という限定された意味に押え込んだ上でこれを否定する<sup>67)</sup>。フェアによると、「ゼングレは自分の時代 [アーデナウアー時代] から出発してゴットヘルフを理解しよう

とし、彼を復古時代やビーダーマイアーに広げて規定した。我々は疑いもなく彼に復古的、ビーダーマイアーの特徴を見る。しかし、その特徴は彼が時代から影響を受けていたロマン主義と同様、むしろ副次的要素である<sup>70)</sup>」のだ。フェアにとってゴットヘルフとは「どの文学思潮にも組することなく思いのまま書いた<sup>71)</sup>」、時代を超越する存在なのであり、彼の政治思想の変化に関して、「学生時代の炎のようなリベラリズムから晩年の明白な保守思想への変化という考え方は、本質的には誤りである。変わったのはむしろ『時代精神』の方である<sup>72)</sup>」と、あくまでもゴットヘルフの普遍性を強調するのである。

このフェアの方向性を引き継いでいるのが A. レーバーである。レーバーは、「ゼングレやマルティニーはゴットヘルフの歴史的位置づけという正当な目標を追求したのであるが、その歴史的諸条件にもかかわらず、一回的現象を余りにも平均化し、ドイツの文学潮流の中へ組み入れ過ぎた<sup>73)</sup>」と、ドイツにおける歴史的ゴットヘルフ研究を批判した。その上で彼自身は今までのスイスの非歴史的とも言える賛歌と、ドイツの過剰な歴史的平均化の中間を進むのだとして<sup>74)</sup>、作品の文体分析に向うのである。このレーバーの研究態度は、実は最近のスイスにおけるゴットヘルフ研究の特徴を示して興味深い。まず第一に、彼らは歴史的視点よりむしろ純粋な作品解釈分析に重心を置く。たとえば、U. ヤウツ<sup>75)</sup>は文学史の問題にほとんど触れることなく、一見無配慮に書かれたように思われるゴットヘルフの作品の語りの構造の解明を試みる。彼は H. ヴァインリヒと K. ハンブルガーのテーゼを援用して、この牧師作家においては物語の部分と省察、教化の部分が異質な存在として並置されているのではなく、教化という全体の目的のために連続的に構築された統一体をなしていることを示した。第二に、スイスの研究者はたとえ十九世紀の歴史状況を読み込む場合でも、それを狭いスイス国内のそれに限定する傾向がある。たとえば、A. シュベンゲラーは同時代の政治・社会状況の変動とゴットヘルフに見られる政治思想の変化を考察するが、その歴史的視野はスイス国内にとどまり、ドイツやヨーロッパ全体の文脈には余り触れないのである。こうした状態において、前述したフェアも1979年出版の小冊子<sup>77)</sup>では、従来からの研究姿勢であった「キリスト教的伝統」という一種普遍的な基準を堅持し、ただゴットヘルフの宗教的意義を主張するだけであるし、最新の研究においても<sup>78)</sup>、過去の研究の反復に終始し、ビーダーマイアー期との関係などの歴史的問題については沈黙するのみである。従って我々も R. パウリンやゼングレの「ゴットヘルフを余りにスイス人にまかせ過ぎた<sup>79)</sup>」という厳しい批判を正当と考えざるを得ないのである。

ところで、ドイツ人ながらスイスの研究者に近い立場を取るのが、H-P. ホルである。ホルは研究者たる者ゴットヘルフに公平であるべきで、作品に解釈の暴力をふるうようなことがあってはならないとドイツの研究を批判した上で、自らは、神話創造者としてゴットヘルフを歴史的状況の中に入れ、また彼の小説を時代の記録として解釈することによって、ムシュクとゼングレ、すなわちスイスとドイツの研究を調停しようとする<sup>82)</sup>。ホルは歴史学の視点を導入すること



で、ゴットヘルフが産業革命という過渡期に生きた作家であり、従ってその作品も全体として危機の時代の表現であると正しく捉えるのであるが、その一方で、ゴットヘルフにおける「ペガサス」と「農耕馬」という相対立する性質を融合するために、「人類全体の詩人」という普遍性を強調する。ホルによれば、この普遍性によってゴットヘルフの社会批判、否その存在自身が、たとえばフランクフルト学派による管理社会批判に相通じるように、十分に現在への射程を持つというのである。しかし、現代の問題と十九世紀前半の問題の事象的パラレルをいくら並べても、同時代的であるが同時に普遍的でもあるという弁証法は汲み出されはしない。なぜなら、時代状況と原因に対する精密な比較が十分になされていないからである。従って、ホルの主張する当時のどの政治的立場からでもなく全てを公平に見る態度、すなわち保守主義にせよ近代主義にせよ歴史的には永劫唯一絶対のものではあり得ないとの立脚点にもかかわらず、全体の印象としては、彼は終始ゴットヘルフの立場の弁明に立っており、結局これは彼自身が解釈者の陥るわなとして注意を喚起した、作家に自己移入するというあの危険を冒していることになるのではないだろうか。

## 7. ゴットヘルフとビーダーマイアー期

ゴットヘルフをビーダーマイアー期の代表的作家と解する立場は、クルックホーン、J. ヘルマント、ゼングレ等によるこの文学史の概念自体をめぐる議論と共に発展してきた。中でもゼングレは三巻に及ぶ大著“Biedermeierzeit”のゴットヘルフを扱う章の冒頭でいきなり、「ゴットヘルフがビーダーマイアー期の代表者の一人であることは、今日疑いようもない」と、ゴットヘルフの文学史上の位置づけに関する議論に幕を引いている。果してこの勝利宣言が全面的に正しいかどうかは断言できないが、最近の有力な研究のほとんどがゼングレ等の建てた基盤の上に乗っていることもまた紛れなき事実である。たとえば、H. フリッツはビーダーマイアー期に復興したレトリックの伝統に着目し、チャールズ・シールスフィールド（1793—1864）とゴットヘルフのレトリックの技法、特に彼らが創作の規範とした伝統的 Ton-Theorie を追求することで、この二人の作家に関しては困難と言われてきた歴史的 position を明らかにしている。また、H. ゲトラーはゴットヘルフのビーダーマイアー期への編入の適合性を作品に現われる牧師像を分析することで証明しようとしている。ゲトラーの場合、比較する資料に限られているので、証明が常に同じ資料からなされるという弱みがあるものの、ゴットヘルフが描く牧師像が、啓蒙主義、ロマン主義の牧歌的牧師像とも写実主義の生々しい現実的牧師像とも異なるという指摘は大きな意義がある。この二人の研究は、取り扱う問題を限定することで、ゼングレや後述するパウアーよりもさらに詳細にゴットヘルフとビーダーマイアー期の関係を説明することに成功しているのである。

さて、ヘルマントとゼングレの方法とテーゼに準拠しつつ、ビーダーマイアー期の視点による新たな総括的ゴットヘルフ像を構築したのが W. パウアーである。パウアーは、ゼングレによ

って政治的復古主義 (politische Restauration), 青年ドイツ派, 青年ヘーゲル派, 三月前期, そしてビーダーマイアーと並んでこの時代を代表するもう一つの方向性として指摘された<sup>97)</sup>「聖職者のビーダーマイアー」(geistliches Biedermeier)<sup>98)</sup>の時代における機能と位置をさらに仔細に検討し, これを「聖職者の復古主義」, あるいは「キリスト教的復古主義」と名づけ, ゴットヘルフをこの運動の粹組の中で捉えようとする。その際, 彼が特に注目するのはメンツェルやゲルスドルフ等に代表されるドイツの復古主義者とゴットヘルフの間の交流関係および政治思想, 世界観の類似である。これによって G. ミュレ<sup>100)</sup>以来しばらく研究者の視野からはずれていたドイツとの関係が再び研究の中心に持ち込まれたのである。パウアーはまずレトリックのカテゴリー<sup>101)</sup>と「類型的, 二元論的世界観, 人間観」を理由にこの作家を明確に写実主義からはずし, 次に, 神学, 政治, 教育, 世界観についてこの時代の中心思潮と比較することで, 彼の聖職者の復古主義への整合性を明らかにしようとしている。パウアーの研究は, ヘルマントやゼングレの前提を余りに無批判に受け入れていること, 貨幣経済, 都市化, 工業化の影響といった社会・経済史の視点より, あくまでも政治史に重心を置いていること, あるいは不必要にスイスの研究者を挑発したり, 歴史記述の不正確さや軽率な表現が散見されることなど不十分な部分も多いが, 包括的研究としては画期的労作であり, これからの研究課題のありかを明白に提示した点においても, 今後はまず彼との議論から出発しなければならないと思われるほどである。

ゼングレ, パウアーの研究を批判的に継承し, ゴットヘルフを「身分制秩序」(ständische Ordnung)の歴史的文脈の中で理解するのが R. ブラントマイアー<sup>106)</sup>である。ブラントマイアーはまずゼングレの「復古主義」概念を批判し, 「身分制秩序の危機こそ保守主義の伝統固執の決定的前提である<sup>108)</sup>」という K. マンハイムの理論と M. グライフェンハーゲンの喪失理論<sup>109)</sup>が, ビーダーマイアー期の小説の持つ伝統への愛着という特徴の説明に適用できると考える。その際に彼がとる時代認識は W. コンツェによる社会史的歴史理解であって, この時代に社会基盤全体の危機, すなわち伝統的支配型態の解体を見る。次に, 彼はパウアーの教会とキリスト教の影響力が主要問題であるという聖職者の復古主義の概念規定では, ゴットヘルフの復古思想のもつ社会・経済生活全体での伝統固執が見落される<sup>110)</sup>として, より広範な秩序概念を求める。というのは, 「秩序」とは直接聖書から導き出される理念ではなく, 歴史的に規定されたゴットヘルフの経験世界全体から生じるものだからである。また, 彼は当時の保守主義者によって正当な階級構造として支持された「神の秩序」という概念も, ゴットヘルフの場合は, 歴史的な具体的秩序として考えられていることを強調しておく必要があると, W. エグによるこの概念の神話化を批判する。こうして, ブラントマイアーは最新の社会・経済史の成果を作品解釈に生かすことで, ゴットヘルフの中に「生き家」の理念に基く家父長制的キリスト教の保持, 既存の秩序の承認としての身分制社会の甘受<sup>116)</sup>, 貯蔵経済から市場・貨幣経済への変化の中で徐々に解体されつつある農村共同体の危機意識<sup>117)</sup>, 近代社会(資本主義および社会主義, 共産主義)への反感<sup>118)</sup>などを読み取るの

である。彼の研究はビーダーマイアー期の視点による現時点における最も秀れたものと言える。

ところで、この視点から作品論を展開したのが W. ハールと K. リンデマン<sup>119)</sup>である。ハールは、ゴットヘルフの代表作“Uli der Knecht”（1841年）を、当時次第に崩壊しつつあったキリスト教的家父長制の理念「全き家」に対する保守的な回帰願望という軸を中心に解釈し、この作品全体に跨る保守的な教化機能を明らかにする。また、ゴットヘルフを宗教改革期、バロック期にさかのぼる“Hausväterliteratur”および聖職者による教化文学の系譜の中で捉えることで、<sup>120)</sup>ゴットヘルフ研究に歴史的な幅を創出することにも成功している。彼はビーダーマイアー期全般とヨーロッパ社会史への深い見識と洞察力により、ゴットヘルフにおける個人の善意に期待する社会問題の宗教・道徳的解決策の持つ反動的側面を見逃さないし、<sup>121)</sup>また読者論についても、<sup>122)</sup>実際農民は読まなかったことを指摘した上で、「市民中間層も文化的過渡期にあり、産業時代への不安定な展望が社会的に保守的な方向規範を必要とした」と、自己のテリトリーの崩壊を眼前にした市民中産階級の保守的願望、つまりユートピアとしての秩序維持という三月前期の時代特性を正しく把握している。“Schuldenbauer”（1854年）については、<sup>124)</sup>ゴットヘルフの法治国家への反感を相対化すべくベルン州の法制史をまとめ、これによって「ゴットヘルフの作品のモラル・教育的特徴が、より広い社会史的背景を獲得する」<sup>125)</sup>ことを示し、ゴットヘルフ研究における社会史的方法の妥当性と必要性を明らかにした。

最後に、スイスの愛国的研究とも異なる立場からのビーダーマイアー批判に触れておきたい。H. バイアーの研究がそれである。バイアーは、ゴットヘルフにおいて「永遠」（ギンター、ムジック）に見えるものが、単に聖書の宗教からのみ生まれるのではなく、実はワルドー派、再洗礼派、ボヘミア兄弟団、急進敬虔派と連なる *Laienfrömmigkeit* の系譜から生み出されるものであって、これが合理主義、個人主義の表層の下にある農民的共同体の生活と結びついて「永遠」になると言う。<sup>126)</sup>つまり、ゴットヘルフの叙事詩は民衆生活の写実的描写でもビーダーマイアー期の聖職者の復古主義<sup>127)</sup>でもあるいはまた原一自然主義<sup>128)</sup>でもないものであって、それは、たとえばゴットフリート・アーノルト（1666—1714）が原始キリスト教団を例に理想的姿を描いているあの *Laienfrömmigkeit* の伝統に根を持つというのである。というのも、ゴットヘルフはヘルンフト派の賛美者<sup>129)</sup>であったし、宗教改革の継続という彼の基本理念も敬虔派と共通するからである。また、形式化したドグマとルター派の *Amtskirche* への批判的態度、<sup>130)</sup>金融業および居酒屋への憎悪、<sup>132)</sup>法と裁判、<sup>133)</sup>学問と知識への敵意などは全て敬虔派、再洗礼派、ワルドー派にも見られるものだからである。社会問題に関しても、ゴットヘルフはあらゆる問題は宗教教育によって解決できるという敬虔派と同じ立場を取っているというのである。<sup>135)</sup>確かに、ゴットヘルフはある面では敬虔主義的である。しかし、歴史的諸条件を度外視した表面的パラレルをいくら積み重ねたとしても、ビーダーマイアー期とゴットヘルフの関係の反論には決してなり得ない。なぜなら、合理主義、啓蒙主義に対する反発から覚醒運動や内的宣教に見られるような敬虔主義の傾向が強

まったことは、十九世紀前半の歴史的特徴であるし、バイアーが列挙する前述の要素もいちいち全て *Laienfrömmigkeit* の伝統に帰すべきものではなく、むしろキリスト教に本質的に内在している一般的特徴であると考えた方が妥当だからである。従って、バイアーが描き出したのは、厳密な教義学、教義史の議論を欠いた非歴史的ゴットヘルフ像と言わざるを得ない。

## ま と め

ゴットヘルフ研究は、神話的解釈から歴史的解釈へ、すなわち「スイスの大地から生じた自然の産物」とか「全ての時代、全ての潮流を超越する叙事文学の天才」といった神話から、ムジックのデーモン・異教的「祭司」、「預言者」という理解、あるいはギュンターの古典主義美学の規範に基く調和美の天才というこれまた神話的色彩の濃い作家像をへて、ビーダーマイアー期と呼ばれる時代区分への編入に進んできた。その多様性のゆえに「アウトサイダー」<sup>136)</sup>とみなされてきたゴットヘルフも、今や明確な時代認識のもとで理解されるようになったのである。

しかし、ビーダーマイアー期の視点によるゴットヘルフ研究は、この文学史の概念自体がまだ議論の余地を残しているのと同様に、なおも多くの課題を持っている。とりわけ写実主義との境界線については、まだ一般に写実主義作家ゴットヘルフの印象が根強いこともあり、あるいはまた農村小説、農民小説 (*Bauernroman*) に見られる農民描写との関係などを考えると、さらに入念な研究が必要であろう。また、中世、バロック期以来の聖職者文学の伝統の影響、読者論や受容史の各分野、教会史および教義史を十分に配慮した神学的研究、ヨーロッパ史全体の文脈、特にドイツとスイスの保守主義、復古主義との関係などの課題と並んで、この視点からの具体的な作品論の充実が強く望まれる。いずれにせよ、一面的理解に陥らないためにも、ゴットヘルフを作家、政治家、教育者、牧師などと切り刻んで考えるのではなく、あるいは他の時代の価値基準やイデオロギーの偏光レンズを通して見るのでもなく、この作家を時代に則してありのままに、<sup>138)</sup>そしてより良く理解するよう努力することが求められているのである。

## 注

- 1) Friedrich Sengle : *Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld zwischen Restauration und Revolution 1815—1848. Bd. 3. Die Dichter.* Stuttgart 1980, S. 951.
- 2) Werner Kohlschmidt : *Gotthelf-Bild im Säkularjahr.* In : Ders. : *Dichter, Tradition und Zeitgeist.* Bern, München 1965, S. 240.
- 3) Adolf Sarasin 編集。1833年創刊。
- 4) Jeremias Gotthelf : *Sämtliche Werke in 24 Hauptbänden und 18 Ergänzungsbänden.* Erlenbach-Zürich 1911—1977. E5, S. 332.
- 5) Georg Herwegh 編集。1842年1—9月刊。
- 6) Winfried Bauer : *Jeremias Gotthelf. Ein Vertreter der geistlichen Restauration der Biedermeierzeit.* Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz 1975, S. 161.

- 7) ユーモアについては, “Grenzboten” 1851/II, S. 115f ; 1851/III, S. 149. 民衆性については, “Grenzboten” 1846/III, S. 153f.
- 8) “Grenzboten” 1852/I, S. 275ff ; 1853/II, S. 295f. および “Deutsches Museum” (Hrsg. v. Julian Schmidt), 1852/II, S. 703ff.
- 9) Gottfried Keller : Sämtliche Werke. Bd. 22. Zürich 1942, S. 43—117.
- 10) Keller : ibid. S. 58.                      11) Keller : ibid. S. 62f.
- 12) Keller : ibid. S. 109. 『イエレミアス・ゴットヘルプ論』(増田義男訳), 『世界批評大系』4. 筑摩書房 1973年, 198頁。
- 13) Keller : ibid. S. 89.
- 14) Keller : ibid. S. 110. 同訳書198頁。
- 15) Keller : ibid. S. 106. 同訳書196頁以下。
- 16) Keller : ibid. S. 108. 同訳書197頁以下。
- 17) Werner Günther : Jeremias Gotthelf. Wesen und Werk. Berlin 1954, S. 11f. (Früher unter dem Titel : Der ewige Gotthelf. Erlenbach-Zürich, Leipzig 1934.) ; Bauer : a.a.O. S. 36.
- 18) J. H. Wichern : Material zur Ansammlung von Volksbibliotheken, mitgeteilt an die Teilnehmer des Congresses für innere Mission zu Wittenberg, im September 1849. Hamburg 1849, S.7. および Verzeichniß von empfehlenswerthen Büchern für Volks-, Gemeinde-, und Jugend-Bibliotheken. Zusammengestellt von dem Vorstand des evangelischen Vereins für innere Mission in der Grafschaft Mark und den angrenzenden Kreisen. Soest 1877, S. 18. ほか。
- 19) Jeremias Gotthelf : Gesammelte Schriften. Ausgabe letzter Hand. Berlin 1856—58.
- 20) Kohlschmidt : a.a.O. S. 271,
- 21) Adolf Bartels : Jeremias Gotthelf. Berlin, Leipzig 1902, S. 3.
- 22) Bartels : ibid. S. 4.
- 23) Karl Fehr : Jeremias Gotthelf (Albert Bitzium). Stuttgart 1967, S. 86.
- 24) Walter Muschg : Die Zerstörung der deutschen Literatur. Bern 1956, S. 283ff.
- 25) Josef Nadler : Literaturgeschichte der deutschen Schweiz. Leipzig, Zürich 1932, S. 346.
- 26) Jeremias Gotthelf : Sämtliche Werke. Siehe : Anm. 4.
- 27) Roger Paulin : Jeremias Gotthelf. In : J. Hermand und M. Windfuhr (Hrsg.) : Zur Literatur der Restaurationsepoche 1815—1848. Stuttgart 1970, S. 264.
- 28) Muschg : Gotthelf. Die Geheimnisse des Erzählers. München 1931, S. 124f.
- 29) Muschg : ibid. S. 151.                      30) Muschg : ibid. S. 206.
- 31) Muschg : ibid. S. 192.                      32) Muschg : ibid. S. 194.
- 33) Muschg : ibid. S. 197.                      34) Muschg : ibid. S. 198.
- 35) Muschg : ibid. S. 198, 201, 207. など。
- 36) Bauer : a.a.O. S. 12.
- 37) “Ernsthafte Erzählung eines lustigen Tages oder der bestigene und wieder verlassene Garten” (E12, S. 71ff).
- 38) 姉 Marie Bitzium (1788—1860) への手紙 : 29. 5. 1821 (E4, S.24ff), 12. 8. 1821 (E4, S. 30ff), 7. 9. 1821 (E4, S.38ff).
- 39) Muschg : Jeremias Gotthelf. Eine Einführung in seine Werke. Bern, München 1954, S. 21.
- 40) Muschg : ibid. S. 238.                      41) Muschg : ibid. S. 8f.
- 42) Sengle : Zum Wandel des Gotthelfbildes. In : Ders. : Arbeiten zur Deutschen Literatur 1750—1850. Stuttgart 1965, S. 202f.

- 43) Kurt Guggisberg : Jeremias Gotthelf. Christentum und Leben. Zürich, Leipzig 1939.
- 44) Günther : a.a.O. S. 256f.                      45) Günther : ibid. S. 258f.
- 46) Günther : Neue Gotthelf-Studien. Bern, München 1958. S. 76.
- 47) Günther : Wesen und Werk. S. 219.
- 48) Günther : ibid. S. 220.                      49) Ibid.
- 50) Günther : Dichter der neueren Schweiz. Bd. 1. Bern, München 1963, S. 25f. ; Ders. :  
Jeremias Gotthelf. In : Benno von Wiese (Hrsg) : Deutsche Dichter des 19. Jahrhunderts. Ihr  
Leben und Werk. Berlin 1969, S. 258.
- 51) Günther : Jeremias Gotthelf, die größte epische Begabung der deutschen Literatur in der  
Sicht der heutigen Forschung. In : Universitas 20 (1965), S. 188.
- 52) Günther : Wesen und Werk, S. 208.
- 53) Günther : ibid. S. 209.                      54) Günther : ibid. S. 211.
- 55) Günther : Jeremias Gotthelf. In : B.v. Wiese (Hrsg) : Dt. Dichter, S. 254.
- 56) Günther : Wesen und Werk, S. 220.
- 57) Günther : Jeremias Gotthelf, die größte epische Begabung, S. 186.
- 58) Sengle : Zum Wandel des Gotthelfbildes, S. 204.
- 59) 1954年一年間だけでも25以上のタイトルが挙げられる。Vgl : Clemens Köttelwesch (Hrsg) :  
Bibliographie der deutschen Literaturwissenschaft 1954—1956. Frankfurt/M 1958, S. 221ff.
- 60) Herbert Morgan Waidson : Jeremias Gotthelf. An introduction to the Swiss Novelist. Oxford  
1953, S. 209.
- 61) Paul Kluckhohn : Biedermeier als literarische Epochenbezeichnung. In : DVjS 13 (1935), S.  
12.
- 62) Kluckhohn : ibid. S. 36.
- 63) Bauer : a.a.O. S. 11.
- 64) この時代 (1815—48) の名称については、王制復古期 (Restaurationszeit), 三月前期 (Vormärz),  
ビーターマイアー期 (Biedermeierzeit) と議論があるが、ここではゼングレにならないビーターマイアー  
期に統一する。
- 65) Sengle : Biedermeierzeit, Bd. 3, S. 935.
- 66) Klara Obermüller : Gotthelf, der populäre Unbekannte. In : Frankfurter Allgemeine Zeitung,  
8.2.1979, S. 20.
- 67) Fehr : a.a.O. S. 94ff.
- 68) Fehr : Der Realismus in der schweizerischen Literatur. Bern, München 1965 ; Ders. :  
Jeremias Gotthelf. Poet und Prophet – Erzähler und Erzieher. Bern 1986, S. 20f, 37f, 140,  
209, 226, 236, 238など。
- 69) Fehr : Poet und Prophet – Erzähler und Erzieher, S. 142f. 「ビーターマイアー」の狭い理解はス  
イスの研究の特徴である。たとえば、アンドレオッチはゴットヘルフの家庭重視をゼングレのようにビー  
ターマイアー期の牧歌的のものとの関連で捉えず、キリスト教的 Genrebild とする。しかし、キリスト教  
秩序を背景とする牧歌的 Genrebild も言うまでもなくビーターマイアー期の時代的特徴の一つである。  
Vgl : Mario Andreotti : Das Motiv des Fremden im Werke Gotthelfs. Eine Untersuchung  
anhand ausgewählter Interpretationen. Diss. Zürich 1975, Thal 1975, S. 76f.
- 70) Fehr : Jeremias Gotthelf (Albert Bitzjus), S. 93.
- 71) Ibid.
- 72) Fehr : Besinnung auf Gotthelf. Wege zur Erkenntnis seiner geistigen Gestalt. Frauenfeld

- 1946, S. 9.
- 73) Alfred Reber : Stil und Bedeutung des Gesprächs im Werke Gotthelfs. Berlin 1969, S. VIII.
- 74) Ibid.
- 75) Ueli Jaussi : Der Dichter als Erzieher. Zur parabolisch-didaktischen Struktur von Gotthelfs Erzählen. Bern, Stuttgart 1978.
- 76) Anton Spengeler : Jeremias Gotthelf. Von der politischen und religiösen Metamorphose zum dichterischen Refugium. Diss. Zürich 1975, Luzern 1975. 同傾向のものとしては, Reinhard Straumann: Literarischer Konservatismus in der Schweiz um 1848. Bern, Frankfurt/M, New York 1984. 彼は後述のプラントマイアーの保守主義理論から出発するが, その歴史観は全ヨーロッパの文脈とスイスの独自性の間で動揺している。しかし, 彼は十九世紀の保守主義全体の動きの中でのゴットヘルフの位置をよく捉えている。
- 77) Fehr : Jeremias Gotthelf. Freiburg (Schweiz) 1979.
- 78) Fehr : Poet und Prophet – Erzähler und Erzieher. Siehe Anm. 68.
- 79) Paulin : a.a.O. S. 263. ; Sengle : Biedermeierzeit, Bd. 3, S. 888.
- 80) Hans-Peter Holl : Wie ich als Deutscher zu Jeremias Gotthelf kam. Erlenbach-Zürich, Konstanz 1979. 参照。
- 81) Holl : ibid. S. 18.
- 82) Holl : Gotthelf im Zeitgeflecht. Tübingen 1985. の扉。
- 83) Holl : Wie ich als Deutscher, S. 6f.
- 84) Holl : Gotthelf im Zeitgeflecht, S. 176.
- 85) Holl : ibid. S. 3ff.
- 86) Holl : Wie ich als Deutscher, S.5.
- 87) Holl : Gotthelf im Zeitgeflecht, S. 279f.
- 88) Holl : ibid. S. 245f.                      89) Holl : ibid. S. 247ff. など。
- 90) Holl : ibid. S. 15
- 91) Jost Hermand : Die literarische Formwelt des Biedermeiers. Gießen 1958.
- 92) Sengle : Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld zwischen Restauration und Revolution 1815—1848. Bd. 1. Allgemeine Voraussetzungen, Richtungen, Darstellungsmittel ; Bd. 2. Die Formenwelt ; Bd. 3. Die Dichter. Stuttgart 1971, 1972, 1980.
- 93) Sengle : Biedermeierzeit, Bd. 3, S. 888.
- 94) Hubert Fritz : Die Erzählweise in den Romanen Charles Sealsfields und Jeremias Gotthelfs. Zur Rhetoriktradition im Biedermeier. Bern, Frankfurt/M, München 1976.
- 95) Hans Göttler : Der Pfarrer im Werk Jeremias Gotthelfs. Ein Beitrag zur Stellung des Geistlichen in der Literatur der Biedermeierzeit. Bern, Frankfurt/M, Las Vegas 1979.
- 96) Bauer : a.a.O. S. 16.
- 97) Ibid. ; Sengle : Biedermeierzeit, Bd. 1, S. 137ff.
- 98) ドイツでは Wolfgang Menzel (1798—1873), Ernst Wilhelm Hengstenberg (1802—1869), Irenäus Gersdorf, スイスでは Johann Jakob Reithard (1805—1857), Abraham Emmanuel Fröhlich (1796—1865) が代表的存在であった。
- 99) Bauer : a.a.O. S. 16.
- 100) Gabriel Muret : Jeremias Gotthelf in seinen Beziehungen zu Deutschland. München 1913.
- 101) Bauer : a.a.O. S. 124ff.                      102) Bauer : ibid. S. 122f.
- 103) Bauer : ibid. S. 11f, 124. など。

- 104) たとえば、「まだ政治的ではない覚醒運動」(S. 25.)。覚醒運動はイギリスから資金援助を受けており、これは反ナポレオンという政治的意味を有していた。
- 105) たとえば、「1813年メッテルニヒとオーストリーの同盟者はスイスに侵入し……」。(S. 80.)
- 106) Rudolf Brandmeyer : Biedermeierroman und Krise der ständischen Ordnung. Studien zum literarischen Konservatismus. Tübingen 1982.
- 107) Brandmeyer : ibid. S. 2ff.                      108) Brandmeyer : ibid. S. 1.
- 109) Brandmeyer : ibid. S. 7.                      110) Brandmeyer : ibid. S. 5.
- 111) Brandmeyer : ibid. S. 58.                      112) Brandmeyer : ibid. S. 62.
- 113) Brandmeyer : ibid. S. 55. および脚注。
- 114) Walter Nigg : Jeremias Gotthelf als konservativer Denker. In : G-K. Kaltenbrunner (Hrsg) :  
Rekonstruktion des Konservatismus. Freiburg i. Br. 1972, S. 407—425.
- 115) Brandmeyer : a.a.O. S. 26f.                      116) Brandmeyer : ibid. S. 17f.
- 117) Brandmeyer : ibid. S. 20ff.                      118) Brandmeyer : ibid. S. 34. など。
- 119) Klaus Lindemann : Jeremias Gotthelf. Die Schwarze Spinne. Zur biedermeierlichen Deutung von Geschichte und Gesellschaft zwischen den Revolutionen. Paderborn, München, Wien, Zürich 1983. これについては、Werner Hahl : Lindemann Rezension. In : Arbitrium 1985, S. 184—186. 参照。
- 120) Hahl : Jeremias Gotthelf : Uli der Knecht (1841). Die christliche “Ökonomik” als Roman. In : H. Denkler (Hrsg) : Romane und Erzählungen des Bürgerlichen Realismus. Neue Interpretationen. Stuttgart 1980, S. 9—25.
- 121) Hahl : ibid. S. 13f.                      121) Hahl : ibid. S. 20.
- 122) Hahl : ibid. S. 9.                      123) Hahl : ibid. S. 10.
- 124) Hahl : Jeremias Gotthelf und der Rechtsstaat. Dichtung im Kontext der Rechts- und Verfassungsgeschichte am Beispiel der “Erlebnisse eines Schuldenbauers”. In : Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur 4 (1979), S. 77f.
- 125) Hahl : ibid. S. 80f.
- 126) Hans Bayer : Theologische Quellen und epische Gestaltung Gotthelfs “idealer Pietismus”. In : Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturgeschichte 54 (1980), S. 423f.
- 127) Bayer : ibid. S. 424f ; Ders. : Biblisches Ethos und bäuerliche Lebensform. Die sprachlichen, sozialen und religiösen Grundlagen von Gotthelfs Epik. In : Jahrbuch des freien deutschen Hochstifts 1980, S. 348.
- 128) Bayer : Theologische Quellen, S. 440f.
- 129) Bayer : ibid. S. 444.                      130) Bayer : ibid. S. 443f.
- 131) Bayer : ibid. S. 441, 451, 459.
- 132) Bayer : Biblisches Ethos, S. 370.
- 133) Bayer : Theologische Quellen, S. 438 ; Biblisches Ethos, S. 367f.
- 134) Bayer : Biblisches Ethos, S. 392.
- 135) Bayer : Theologische Quellen, S. 436 ; Biblisches Ethos, S. 372.
- 136) Kohlschmidt : a.a.O. S. 240.
- 137) たとえばマルティニー、コールシュミットなど。
- 138) Sengle : Biedermeierzeit, Bd. 3, S. 950.